

「イスラームの夜明け」——イクバルのウルドゥー詩 (7) ——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、イクバルのウルドゥー第1詩集『鈴の音 (*Bāng-e Darā* 1924年)』に収められた、9連から成る思想詩「イスラームの夜明け (*Tulū'-e Islām*)」の全訳である。

詩集『鈴の音』は3部構成になっており、第1部には1905年までの、西欧留学以前の作品、第2部には1905年から1908年までの西欧留学中の作品、第3部には帰国後の作品が収められている。各部はそれぞれナズム (*naẓm* 特定のテーマについて書かれた詩)の部とガザル (*ghazal* 定型抒情詩)の部に分けられており、第3部の最後は風刺諧謔詩の部となっている。「イスラームの夜明け」は第3部ナズムの部の最後の詩である。

本詩は、1923年4月(あるいは3月)、イスラーム擁護協会 (*Anjuman-e Himāyat-e Islām*)の年次大会でイクバル自らが発表し、加筆訂正なしに『鈴の音』に収められた¹⁾。

本詩最大の特徴は、外国勢力の干渉や侵略を跳ね返したトルコへの称賛が随所に見られることである(詩の中には、「トルクメンの栄華 (*shikōh-e turkmānī*)」、「トゥーラーン人 (*tūrānī*)」、「タタール人の若者たち (*jawānān-e tatārī*)」、「縐子の服を着たタタール人 (*aṭlas-qabāyān-e tatārī*)」という言い方が見られるが、「トルクメン」、「トゥーラーン人」、「タタール人」は漠然とトルコ人を指していると考えられるので「トルコ人の栄華」、「トルコ人」、「トルコ人の若者たち」、「縐子の服を着たトルコ人」と訳しておいた)。イクバルは、トルコはイランやアフガニスタンの覚醒にも大きな影響を与えたと考えており、この時期のイクバルにとってトルコは希望の星であった。

* 大阪大学大学院言語文化研究科教授

1) Raftī-ud-dīn Hāshimī, *Iqbāl kī Tawīl Nazmēn*, Lahore, 1985, p.135.

イスラームの夜明け

星の光が薄らげば明るい朝が訪れる
地平線より日が昇り、眠りの時は過ぎ去った
東洋の死せる血管に命の血液が巡りだした
この秘密をシーナーやファーラービーは悟れない²⁾
西欧の嵐はムスリムをムスリムとした
荒波に揉まれてこそ真珠は輝きを得る
ムスリムは再び神から授かるようとしている
トルコ人の栄華を、インド人の知性を、アラブ人の雄弁を
まだ蕾が夢見心地でいるならば——おお、夜鶯^{フルフル}よ
「もっと大きな声で歌うがよい、歌への関心が減ったと思うなら³⁾」
花園にしようと、巢にしようと、枝にしようと、身を震わせるがよい
水銀から水銀の性質を取り除くことはできないのである⁴⁾
清らかな目は馬の鎧飾りを見たりするであろうか
勇者の勇気が目に入っているというのに
チューリップの心に願望の明かりを灯すがよい
花園の土の粒一つ一つを探求に駆り立てるがよい

ムスリムが流す涙は今や春の雨である
「神の友」アブラハムの海に再び真珠が生まれようとしている⁵⁾
イスラーム共同体の頁は再び堅牢に結び合わされる
ハーシムの枝は再び葉と実を付けようとしている⁶⁾
あのシーラーズのトルコ人はタブリーズとカーブルの心をしっかりと掴んだ⁷⁾
そよ風は花の香りを旅の道連れとするのである
オスマン朝の人々に悲嘆の山が崩れ寄せようとも
多くの星が血を流してこそ朝は来る
世界を統治するより世界を認識することの方が難しい
心が血に染まってこそ心眼が開くのである
長い間水仙は視力のなさを嘆いている⁸⁾
花園に見識ある者はめったに生まれない

2) イブン・シーナー (Ibn Sīnā 980–1037)、ファーラービー (Fārābī ca. 870–950) は著名なムスリムの哲学者。

3) ペルシア詩人ウルフィー (‘Urfī b. 1555/6) の句を引用している。

4) 水銀は身悶えする者の比喩としてよく用いられる。

5) 春雨の雨粒が目の中に入って真珠になると考えられていた。

6) 「ハーシムの枝」ムスリムのこと。イスラームの預言者ムハンマドは、クライシュ族のハーシム家に属した。

7) この半句はペルシア語。「シーラーズのトルコ人」という語は、ハーフィズ (Hāfīz ca. 1326–ca. 1390) の有名なガザルに現れるが(「あのシーラーズのトルコ人が私の心を受け入れてくれるなら、そのほくろの代価としてサマルカンドとブハーラーを捧げよう」)、ここではムスタファ・ケマル (Mustafa Kemal 1881–1938) を指す。彼の活動がイランやアフガニスタンにまで大きな影響を及ぼしたということ。

8) 水仙はよく目に譬えられる。

歌うがよい——夜鶯よ——おまえの歌声で
鳩の弱々しい体に鷹の心を宿らせよ
胸に秘められた生の秘密を告げ知らせるがよい
ムスリムに熱烈な生の物語を語って聞かせるがよい

おまえは不滅の神の手であり舌である
信仰を持つがよい——愚か者よ——疑念に身を任せるとは
ムスリムの目的地は蒼穹の彼方にある
おまえは星を舞い上げて進む隊商である
家は壊れ、住人は消えるが、おまえは不滅である
おまえは神の最後の言葉であり、永遠なのである
おまえが流す心の血でチューリップの花嫁は飾られる
おまえはアブラハムの血統に属し、世界の建設者なのである⁹⁾
おまえには生の可能性が委ねられている
おまえはこの世界の秘められた力を試すのである
この水と土の世界から久遠の世界に
預言者様がお持ちになられた贈り物——それがおまえなのである
イスラーム共同体の歴史から明らかである
おまえがアジア諸民族の守護者であるということは
再度学ぶがよい、真理を、正義を、勇気を
おまえは世界の指導者とならねばならないのである

世界の目的とは、イスラームの神髄とは
友愛の世界統治である 愛の横溢である
肌の色や血統の偶像を破壊し、イスラーム共同体に身を委ねよ
トルコ人もイラン人もアフガン人もありはしない
花園の鳥といつまで枝にいるつもりなのか
おまえの翼にはクヒスターンの鷹のような飛翔力があるというのに¹⁰⁾
疑念に満ち溢れた世界の中でムスリムの信仰は
荒野の漆黒の夜に輝く隠者の灯火である¹¹⁾
ローマ皇帝とイラン国王の専制を倒したものは何か
それはハイダルの力、アブー・ザッルの清貧、サルマーンの真心である¹²⁾
イスラーム共同体の自由の民は何と華々しく現れたことか¹³⁾
数世紀にわたって囚われている者たちは戸の裂け目から彼らを覗き見ている
人生を安定させるのは不動の信仰である

9) アブラハムはカアバ神殿の建設者だと考えられている。

10) クヒスターン (Qūhistān) イラン、ホラーサーン地方の地域名。

11) 「隠者の灯火」 救いの灯火ということ。

12) ハイダル (Haidar) は第4代カリフ、アリー (‘Alī) のこと。アブー・ザッル (Abū Dharr) とサルマーン (Salmān) はイスラーム初期の著名なムスリム。

13) 「イスラーム共同体の自由の民」 トルコ人のこと。

それでトルコ人はドイツ人より強かったのである¹⁴⁾
この燃え上がる土塊^{つちくれ}に信仰が生まれると
それは「誠実な霊」天使ガブリエルの翼を生み出すのである

奴隷の身では剣も策略も無益である
力強い信仰が生まれればおのずと鎖は切れるのである
その腕の力を誰が知ろう
ムスリムの一睨みで運命は一変する
聖者の位、王座、森羅万象に関する知識を世界は求めているが
それらは信仰項目の一つを註釈したものに過ぎない
しかしアブラハムのような慧眼はそう簡単には生まれない¹⁵⁾
欲望が密かに幻影を作り出すからである
主従の区別が人間の争いのもとである
用心せよ——抑圧者よ——天の罰は厳しいから
土でできていようと光でできていようと万物の本質は一つ
原子の心臓を切り裂けば太陽の血が滴るのである
確固たる信仰、不断の努力、世界を魅了する愛——
これこそ生の闘争における勇者の剣である
勇者に必要なのは気高い精神、高潔な人格
燃える心、清らかな眼、奮い立つ魂である¹⁶⁾

鷲のように襲いかかった者たちは尾羽打ち枯らし
夕刻の星は夕焼けの血に染まって現れた
海底にいた者たちは海に葬られ¹⁷⁾
波の平手打ちを浴びていた者たちは真珠となった
錬金術を誇っていた者たちは道の埃となり
額づいていた者たちは錬金術師となった
足の遅い使者はようやく生の言葉をもたらし
電気によって情報を得ていた者たちは無知なままであった
聖地は辱められた——聖地の長が愚かであったために¹⁸⁾
トルコ人の若者たちは何と賢明であったことか
天翔る光が大地に言った¹⁹⁾
「この土塊の方がはるかに生き生きとしており、力強く、光り輝いている²⁰⁾」

14) 第1次大戦後、トルコが外国勢力の圧力や侵略を跳ね返したことに言及している。

15) アブラハムは、偶像や日月星辰を神と見なさず、唯一絶対神の教えに従った真の信者と考えられている。

16) この対句はペルシア語。

17) 「海底にいた者」潜水艦の乗組員のことであろう。

18) 1916年に起こった、メッカ知事フサイン(Husain b. 'Alī ca. 1852–1931)による、オスマン朝に対する反乱に言及している。

19) 「天翔る光」天使のこと。

20) 「この土塊」トルコ人のこと。

この世界を信仰を持つ者は太陽のように生きる
沈んでも沈んでも顔を出す
個人個人の信仰こそイスラーム共同体建設の源である
これこそがイスラーム共同体の運命を切り開く力である

おまえは天地創造の秘密である——自分の真の姿を見るがよい
自我の秘密を知り、神の言葉を伝えるがよい
貪欲さが人類を分断した
友愛の物語となり、愛の言葉とならねばならぬ
インド人が、ホラーサーン人がいる アフガン人が、トルコ人がいる
おお、岸に縋る者よ——飛び跳ねて無限となるがよい
おまえの翼は肌の色や人種の埃で汚れている
おお、聖地の鳥よ——飛ぶ前に埃を払うがよい
自我に沈潜せよ——愚か者よ——自我こそが生の秘密である
朝夕の循環から抜け出し、永遠となるがよい
人生の戦場においては鋼鉄のようになり
愛の寝室においては絹の衣となるがよい
山や荒野では奔流となり
花園では歌う小川となるがよい
おまえの知識と愛は無限である
おまえを超える音は自然の楽器には存在しないのである

今なお人は専制の哀れな獲物である
人が人を獲物にするとは何ということであろうか
現代文明の輝きは目を眩ませるが
それは偽の宝石を巧妙にちりばめただけのものである
西欧の学者たちが誇りにしていた学識は
貪欲の血まみれの手握られた争いの剣である
深慮遠謀の魔力でも文明は安定しない
その土台が資本主義であれば
行動次第で人生は天国にも地獄にもなる
この土塊は元々光でも火でもない²¹⁾
夜鶯に歌を教え、蕾の結び目を解くがよい
おまえはこの花園の春風である
再びアジアの心から愛の火花が放たれた
縐子の服を着たトルコ人が大地を駆け巡っている
さあ、来るがよい——弱々しい命の買い手が現れた
「やっと隊商が我々の側を通りかかった²²⁾」

21) 人間の本性は本来善でも悪でもないということ。

22) この対句はペルシア語。第2半句は、1語変更されているが、ナズィーリー・ニーシャープリー (Nazīrī Nishāpūrī)

さあ、酌人よ、来るがよい——枝の間から瘦せ衰えた鳥の鳴き声が聞こえてきた——
春が来て、恋人が来た 恋人が来て、心は安らぎを得た
春の雲は谷と荒野に天幕を張り
滝の轟きが山の頂から聞こえてきた
おまえにこの身を捧げよう——酌人よ——かつての習わしを思い出すがよい²³⁾
歌い手たちが続々とやってきた
禁欲者の許を離れ、遠慮なく杯を手取るがよい
古い枝から夜鶯の歌声が久し振りに聞こえてきた
熱心な者たちにバドルとフナインの戦いを制した御方の話をしてやるがよい²⁴⁾
私の目にはその不思議な御力がはっきりと見える
「神の友」アブラハムの枝は私たちの血で蘇ろうとしている
愛の市場で私たちの金貨は本物と証明されたのである
私は殉教者の墓にチューリップの花びらを撒く
その血は私たちの共同体の木に力を与えてくれた
「さあ花を撒き、酒を注ごうではないか
天を裂き、新たな土台を築こうではないか²⁵⁾」

d. 1604) の句。

23) 「かつての習わし」 酒(恩恵)を与えるという習わし。

24) 「バドルとフナインの戦いを制した御方」 イスラームの預言者ムハンマドのこと。624年のバドル(Badr)の戦いや630年のフナイン(Hunain)の戦いでムハンマドの軍隊は勝利を収めた。

25) 最終連はすべてペルシア語。最後の対句はハーフィズのガザルからの引用。